

たくさんの言葉とともに

With a multitude of words

桜蔭中学校高等学校 教諭
白井 智子
(2019 年度修了生)

1. はじめに

私は 2020 年 3 月に首都大学東京大学院理学研究科数理科学専攻博士前期課程を修了し、教員になりました。慌ただしい毎日を送っている今でも、4 年前、教職課程センターに通っていた頃を思い出すことがあります。どんな教員になりたいのかという夢を話したり、研究と採用試験勉強の両立の苦労を共有したり、面接の練習を一緒にしたメンバーは、当時の私の心の支えになってくれた仲間でした。先生方は、単なる採用試験対策にとどまらず、教員になることへの期待や不安をいつも丁寧に聞いて励ましてくださいました。

2023 年 1 月 8 日の教職研究会立ち上げのプレ企画では、「教員 3 年目の今、感じていること」と題してお話をさせていただきました。後輩たちの参考に少しでもなれば、そしてお世話になった先生方に「頑張っていてやっています」という報告ができれば、と思って引き受けました。お話しする内容を考える過程で教員になってからの葛藤や不安を整理することができ、このような機会をいただけたことをうれしく思いました。ここでは、そこでお話した内容の一部を実践報告として記しておきます。

2. 大切にしている言葉

学校という場合は、日々多くの言葉が飛び交っていてにぎやかな場所です。

思春期真っただ中の生徒は、あふれる思いを言葉にしてくれることもあるし、言葉にならない気持ちを抱えていることもあります。私が教員として生徒と話するとき、まずはゆっくりじっくり生徒の言葉に耳を傾けるのは前提として、生徒になんと言葉をかけたら良いだろうか、どういう言い方が伝わるのだろうかかと悩むことが多くあります。特に生徒を叱ったり悲しい話をしなくてはいけないときは、神経をつかいます。その理由は、生徒にとって教員からの言葉は、「先生から言われた」というだけで重みがあり心に深く残るかもしれないから、そして、強い言葉をつかって生徒を管理するのではなく優しい言葉で生徒の成長に寄り添いたいと思っているからです。

保護者との言葉のやりとりもまだまだ難しいことの一つです。信頼関係を築いていきたいと思う気持ちがあるからこそ、緊張もします。自分が生徒だった経験は当然ありますが、保護者の経験はありません。保護者の気持ちをどこまで理解できているのか不安になることも多いです。

一方で、生徒に言われてうれしかった言葉や、保護者と一緒に生徒のことを考えていこうと前向きな気持ちになった言葉もあります。教員になってたった4年でもさまざまな言葉が私の中にありますが、その中から二つを紹介します。

(1) 「没収」ではなくて「預かる」

生徒が学校に持ってきてはいけない物や使ってはいけない物に関するルールというのは、学校によってさまざまだと思います。そういった物に関する指導が私はとても苦手でした。

例えば携帯電話・スマートフォンです。私の学校では登下校の緊急時のみ使用可となっています。校内では電源を切ってカバンにしまうことがルールです。もし校内で使っていたり鳴ってしまった場合は、一度預かって指導をした後、下校時に返却します。しかし、授業中やホームルーム中に鳴ってしまうこともあります。また、放課後にこっそり使っているのを目撃してしまうこともあります。

学校生活に必要な物の電源を切っていないことは、授業を一緒に受けている他の生徒の邪魔になります。学校にいる間は携帯電話ではなく、もっと違うことに向き合ってほしいという気持ちがあります。ルールの必要性も十分分かっているつもりですが、「没収」ということは、生徒の大切な物を教員という権力を使って勝手に奪い取っているという気持ちになってしまうのです。自分の迷う気持ちにふたをして「それが学校のルールだから」と指導することも方法の一つなのかもしれませんが、私にとっては抵抗がありました。学校や集団で生活するための規律と、生徒と個人として向き合ったときの気持ちの折り合いの付け方が難しいなと感じていました。

そんなとき、都立大の教職課程センターの先生方と卒業生との交流会がオンラインで開催されました。働き始めて困っていることはないか？と先生が聞いてくださったとき、私はこの悩みを相談しました。そのとき、竹浪隆良先生が教えてくださったのは「預かる」という言葉をつかうという方法でした。「自分でルールを守れないなら、我慢できなくて携帯電話を触ってしまうのなら、こちらで一時期預かります」というふうに考えるということでした。それからは「没収」ではなくて「預かる」という言葉をつかっています。生徒からしたらどちらも大きな違いはないのかもしれませんが、自己満足にすぎないのかもしれませんが、それでも私はこの「預かる」という言葉の柔らかさに、今も助けられています。

(2) 「(子育てのプロではなくても) 教育のプロだよ」

担任になってからは特に、保護者と話をする機会も増えました。電話での会話はもちろん、保護者会や保護者面談などもあります。初めはとても緊張していました。保護者は私より生徒のことをずっとよく知っているし、私は子育てをしたこともないし…。まだ経験が浅い私のような担任に対して、どう思われるだろうかという不安もありました。

いよいよ初めての保護者会というとき、私がとても緊張していると、同じ学年で担任している教員が、私のことを「教育のプロ」だと言ってくれました。「保護者は子育てのプロ。白井先生は子育てをしたことがないから子育てのプロではないけれど、教育のプロだよ」。私はその言葉にとっても救われる思いがしました。自分で「教育のプロ」と言うのはあまりにもおこがましいですが、生徒を教え導くに値する人でありたいと思っています。「教育のプロ」という言葉は、プロとしてきちんとしてなくてはならないと背筋を伸ばさせてくれる言葉でもあり、プロとして自分は何をすべきか何を話すべきか、自分の考えの軸にもなっている言葉です。保護者と話すとき、「(子育てのプロではないけれど)教育のプロとして、保護者と一緒に生徒を見守っていききたい」ということが伝わるような言葉を選ぶことを心がけています。そして実際に保護者からうれしい言葉をかけてもらうときは、こんな私でも生徒に寄り添っているのだと励まされます。

3. 生徒を支える言葉を探して

他にもさまざまな場面で、言葉選びに悩み、言葉に助けられてきました。生徒と話していると、場合によっては、とっさに生徒を支える言葉をかけなくてはならないこともあります。そのために私がこれまで実践してきた方法は、特に珍しいものではありませんが、ここで紹介します。

(1) 報告・連絡・相談

同じ学年の教員、場合によっては校長など管理職に報告・連絡・相談をすることは、さまざまな理由が必要であり大切だと思っています。そうすると、こんな言葉をかけるというよと言葉選びのヒントをもらえることも多くあります。実際に「なんと言っておくのが良いでしょうか」と相談することもあります。いろいろな経験をしてきた先輩である教員に小さなことでも相談できるというのは、ありがたい環境です。

(2) 周りの教員の観察

生徒を叱らなくてはいけないとき、悩んでいる生徒の話や聞くときなど、周りの教員はどのような言葉をつかっているのだろうと観察もしています。あるいは対応に配慮が必要な生徒に対して、どんな言葉で話しているのだろうかというのを観察したりもします。「盗み聞き」という言葉は悪いですが、さりげなく様子をうかがうことで学ぶことはとても多いです。

(3) 生徒と同じ方向を向く

生徒だったらどう感じるだろうか、なんと言言葉をかけてほしいだろうかという生徒の立場で考えるようにしています。私は「学校の先生になりたい」と思ったときから、生徒の寂しい気持ち、悲しい気持ち、怒っている気持ちなどに寄り添える大人になりたいと思ってきました。その初心をいつも忘れずにいたいのです。さらに、横に並んで同じ方向を向くことも一つの方法です。向き合って目を見て話すことももちろん大切ですが、同じ方向を向いて話を聞いたほうが生徒は話しやすいということもあると考えています。

4. おわりに

教員という仕事は、学生の時に思い描いていたものより忙しく、責任の重い仕事だと感じています。中高生が集まっている場所なので当たり前なのかもしれませんが、毎日ここには書ききれないほどたくさんのいろいろなことが起きて、そしてその一つ一つに私は感情を揺さぶられています。楽しかったり、嬉しかったり、面白かったり、悲しかったり、辛かったり、悩んだり、喜怒哀楽の激しい仕事だと感じています。本当にいろいろなことがあるけれど、生徒と一緒に笑える時間が何よりうれしい瞬間で、この仕事をしていて良かったと思えます。

そのような場に送り出してくださった都立大（当時は首都大）の先生方、事務の方々に感謝しております。まだまだ未熟でこの先大変なことはたくさんあると思いますが、ここから私はさらに経験を重ね、より豊かな感情で生徒に向き合い寄り添っていきたいです。